# 11.15,16,17 科械科山猫ストライキ

## 総括概要

―ストライキ実行委員会

日大斗争を一年有余経る中で全日学同斗争は、東大1.18,19を頂点として個別学園改良斗争の枠を明確に突破し、その領は日本帝国主義打倒の階級的な視点を持つ斗争へと発展しようとしている。しかしながら、当局者達は国家権力と一体となって、又、その後からの力として学内右翼を使えて、反革命を行ない続けている。4.28に於ては東大全共斗が三千の大部隊をもって取り組み得た。この原因を生んだのは、正に彼山自身の反動性が故であろう。それに対する国家権力の弾圧はさらに激しい、露骨なものとなって現われた。本紙面上で多くの同志諸君が語ってくれる様に、今や我々は道視的に個別学園斗争と政治斗争と区別する見方はできないであろう。大衆から我々は多くの大衆はまだその見しき性格を有する道視眼的な区別する傾向が強いと云う事も見のがせない事実であるをも認識すべきであろう。大衆を獲ちとっていく政治斗争・街頭斗争は行先なくあろう。その大衆をつかに集約し、組織化するのか、と云う点を持って街頭斗争・政治斗争を思考しなければ今らないであろう。これは、サークル、フラクション等の中から行踏まえて科械工学科に於ては、斗事委員会を主体とするストライキ実行委員会は山猫ストライキ大衆の前に提起していったのである。

力量[illegible]ではあるが、[illegible]感じた事は[illegible]の階級形成の眼としてお[illegible]に統一[illegible]しかし今[illegible]呼応してゆくプログラム[illegible]の分断をはかって来たのであろう。それに対して、大衆は大衆に七分[illegible]提起できず、右傾化をくい止める事が出来なかった現状を悲観的に総括しなければいけないであろう。これらの事柄から、我々が確認しなければならない事は階級形成は一つの大きな政治焦点にぶつけるだけではなし得ないと云う事である。日常における大衆の中での階級形成を政治焦点を足がかりとしてさらに深化させて行かなければならないであろう。又、それが個別経済主義的斗争と階級斗争の相互関係ではないであろうか。

願望では斗争は勝利しないのである。さてそこで次に問題となるのは、日常生活においていかに大衆の階級形成を行うかである。これは先にものべた様に大衆の中で行なわなければならないであろう。現実的には[illegible]その方向性が提示されているだろう。

我々が階級斗争に勝利する為には、全てに対して全力をつくして行う事以外には今